

平成29年4月

福岡市教育委員会
小中学校・特別支援学校
学 校 長 様

団体名 ふくおか教育を考える会協議会
子どものための表現教育広め隊
代表者 多田 育美

子どもたちのコミュニケーション能力を学校教育において育むためのご提案

拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

私どもは演劇づくりを通じて子どものコミュニケーション能力を育む目的で、学校教育に表現教育を広める活動をしている有志の市民団体、「子どものための表現教育広め隊」です。顧問に平田オリザさんを迎え、2016年に発足いたしました。現在、福岡や佐賀などの学校、大学などで、アクティブラーニング手法としての演劇教育を普及させるための活動を展開しています。本団体の母体「ふくおか教育を考える会協議会」は福岡で41年にわたり、どの子にもゆきとどいた教育を願って活動している会です。

このたび子どものための表現教育広め隊では、芸術家を派遣して小学校6年生、中学校1年生で演劇を通じたコミュニケーションの授業（国語または総合の時間）を実施することをご提案いたしております。内容は次ページ以降に記載いたしておりますので、ご参照ください。

詳細については、後日、貴校に訪問しご説明させていただきたいと思っております。よろしくご検討くださいますようお願い申し上げます。

記

p 2

- ・授業の概要（プログラム例）
- ・実施にあたって 事業回数と講師
- ・取組みの効果
- ・芸術家派遣の予算について

p 3

- ・顧問 平田オリザ プロフィール
- ・ワークショップの講師
- ・出前授業の新聞記事

p 4

- ・平成28年度事業報告書 福岡県共助社会づくり基金ニュースより

<問合せ先 ふくおか教育を考える会協議会>

〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-13-103 TEL : 092-406-4125

E-mail : f-kyoiku@helen.ocn.ne.jp URL : fkyoikuco.wix.com/fkyoiku

後援 福岡市教育委員会 筑紫野市教育委員会

■ 授業の概要 外部講師による演劇ワークショップ

○プログラム例 「対話劇を体験しよう『転校生がやってきた』創作」(3時間)

内容：小グループに分かれて台本作りと発表を行う

目標：「仲間と一緒に表現すること」の喜びを実感する。また、作る過程での合意形成の難しさ、時間管理の重要性などを理解する。

■ 実施にあたって

○授業回数 国語、総合等の時間などを活用し、

小学校 45分×4コマ、中学校 50分×3コマ程度が適当。

○講師 ワークショップ講師は、演劇教育の実践経験をもつ福岡の演劇人が担当します。

■ 取組みの効果

(当会顧問、平田オリザさんが座長を務めた、

平成23年8月29日 コミュニケーション教育推進会議 審議経過報告より)

○他者認識、自己認識の向上 ふだんは見ることのない他者の一面を見出したり、自分と異なる状況を疑似的に体験したりすることで、他者認識や自己認識の力が向上する。

○「伝える力」の向上 相互に伝え合うことの喜びに気づき、少しでもうまく伝えたいという意欲により、表現手法が工夫され、「伝える力」が向上する。

○自己肯定感と自信の醸成 子どもの良い面や優れた面が引き出されたり、子どもたちが互いに多面的に発見・評価されたりすることによって、自己肯定感と自信の醸成がなされる。

○学習環境の改善 上記の効果により、子どもたちの相互の人間関係が良好になり、学級の雰囲気改善されて、学級全体としての学力が向上する。また、いじめ・不登校、暴力行為などの問題の解決にもつながる。

○授業改善や学級・学年経営への効果 芸術家等の表現活動の専門家によるワークショップ型の授業は、教員にとって、授業手法や評価方法を見直し、改善する機会となる。また、学級の雰囲気の改善により、学級経営や学年経営が円滑に進む。

■ 芸術家派遣の予算について

文科省「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験(芸術家派遣)」申請

http://www.kodomogei.jutsu.go.jp/communication/dl/h28/shinsei_bosyu.pdf

前年度のスケジュール例①平成28年5月9日(月) 実施校の募集の開始 ②平成28年6月8日(水) 申請期限 ③平成28年6月中旬～下旬 実施校の審査 ④平成28年7月上旬 実施校の内定通知 ⑤平成28年7月上旬～7月下旬 内定校における経費の精査 ⑥平成28年8月上旬 実施校の決定通知 ⑦平成28年9月1日(木)～29年2月10日(金) 事業実施期間

■ 顧問 平田オリザ(劇作家、演出家、元コミュニケーション推進会議座長)

■ アドバイザー 松永典子(九州大学教授) 角和博(佐賀大学教授)

<問合せ先 ふくおか教育を考える会協議会> 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-13-103

TEL:092-406-4125 E-mail:fkyoiku@helen.ocn.ne.jp URL:fkyoikuco.wix.com/fkoyoiku



©T. Aoki

顧問 平田オリザさん

派遣講師



中嶋さと
(劇団14+主宰、
演出家、俳優)



村上差斗志
(劇団14+俳優)



大福悟
(劇団C+主宰
劇作家、演出家)

《平田オリザ プロフィール》

平田オリザは、日本の現代演劇界で、いまもっとも注目されている劇作家・演出家です。2002年度以降中学校の国語教科書で、2011年以降は小学校の国語教科書にも平田のワークショップの方法論に基づいた教材が採用され、多くの子どもたちが教室で演劇を創作する体験を行っています。他にも障害者とのワークショップや、自治体やNPOなどと連携した総合的な演劇教育プログラムの開発など、他に例を見ない多角的な演劇教育活動を展開しています。2000年度より桜美林大学で演劇専攻の教授として教鞭を執り、市民社会に開かれた新しい演劇教育の道を開拓。さらに2006年度からは、国立大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授に就任し、社会と演劇の接点を生み出すための研究を開始。ロボット演劇プロジェクトを指導するなど、多彩な活動を続けています。また四国学院大学では、学長特別補佐として、地域の大学における演劇教育の実践に取り組み、2014年からは、東京藝術大学・アートイノベーションセンター特任教授として、新しい教育、研究領域を切り開いています。(2015年より東京藝術大学 COI 研究推進機構 特任教授)。参考:青年団 HP <http://www.seinendan.org/hirata-oriza>

2016年(平成28年)11月25日(金) 毎日新聞

自由な発想で表現力育む



演劇ワークショップで、体を使って漢字・文字を表現する生徒と教師ら

二日市中 筑山中

プロ演劇人が「出前授業」

特別支援学級 適応指導教室

筑紫野市の二日市中と筑山中で、特別支援学級や校内適応指導教室の生徒たちを対象にプロの演劇人が講師を務める演劇ワークショップが開かれている。今月中に二日市中で4回、筑山中で2回実施するが、回を重ねるとともに生徒たちも慣れて少しずつ変化が表れている。両中学はそれぞれ作品を作り、今月末から来月上旬に校内で発表をする予定だ。

【山崎あずさ】

作品仕上げ校内で発表へ

ワークショップは市民団体「ふくおか教育を考える会協議会」などがつくる「博多の演劇人の、プロの技で、子ども表現力を育む協議体」が主催。1人や2人、または大勢で連携して体を使った動きに挑戦したり、グループで1場面を想像して再現したりする。取り組みを通じて、生徒たちが自発的に考える力や想像力、異なる価値観を持つ人たちとの合意形成力を育むことを目的としている。

二日市中での2回目には、生徒と教師計20人が参加した。三つのグループに分かれて、病院のある「場面」を写真として再現してみようという。講師の大福悟さん(左)がお題を出す。「椅子を三つ持ってくるから、そこに寝てみたら」「私は助手になるのか」。生徒と教師が交じり合う各グループが、限られた時間で医者や患者、看護師などになりきり、驚いたり真剣な表情などを浮かべたりして静止すると、三つの写真が完成した。

特別支援学級の生徒は初回から自由な発想でアイデアを出した。久田麻子教師(右)は「演劇に興味を持ち、自由に発想が広がっているように感じる」と手心を語った。初回は椅子を見守ることが多かった校内適応指導教室の生徒たちも2回目は講師が声を掛けると発言し始めた。

ふくおか教育を考える会協議会の多田育美代表(49)は「楽しみながらコミュニケーション力を身に付けている教育が、福岡では広がっていない。子どもたちが能動的に学べる場を作る手伝いができた」。大福さんは「人は経験を基に想像力を発揮することができる。今回のワークショップが将来、何かに直面した時に役立ってほしい」と話した。

自由提案型 06

子どもたちが、演劇を通じて コミュニケーションやプレゼンを学ぶ

協議体 博多の演劇人の、プロの技で、子どもの表現力を育む協議体

所 在：福岡市中央区白金2-9-13-103

(構成団体と役割)

- 福岡県教育を考える会協議会
・企画運営、事務
- 劇団14+
・演劇づくりのアシスタント、中学校での演劇作り
- 九州大学大学院地球社会統合科学府
・広報、ボランティア ・研究、論文作成
- 筑紫野市教育委員会学校教育課
・中学校での演劇作りの実施

(問い合わせ先)

- 福岡県教育を考える会協議会
電話 092-406-4125
FAX 092-406-4125
メール f-kyoiku@helen.ocn.ne.jp



ワークショップで身体を使って漢字を表現する生徒たち

**課題や
背景、
事業の目的**

子どもをとりまく環境は、コミュニケーションがいらぬ方向に向いている一方で、社会は子どもたちに高いコミュニケーション能力を求めています。また、日本の子どもたちは学びのモチベーションや自尊感情が低いとされます。この課題を解決するには、体験型・参加型の授業を学校教育に取り入れることが有効で、特に演劇が向いていると考えます。

工夫した点

モデルケース実施の際、中学校長と何度も協議を重ね、より多くの学校で演劇ワークショップを行うための方法について検討するとともに、学校との関係づくりを行いました。また、九州大学と協働することで、演劇ワークショップの効果について研究による学術的な裏付けの検証ができました。

**取組内容と
助成金の
使途**

登場人物やセリフを参加者同士で考え、作品を仕上げるといった制作過程を経ることで、コミュニケーションスキルの向上に効果が期待される演劇ワークショップの手法を、教育現場に普及させるための人材育成を行いました。また、モデルケースとして2つの中学校で演劇ワークショップを行いました。助成金は講師への謝金や広報に活用しました。

**事業の
効果や
展開**

子どもたちが「自分の意思を伝える表現力」や「集団で創作物を作り上げる想像力・合意形成の力」を楽しんで身につけることができる演劇ワークショップを、教育現場に普及させていくための人材・モデル事例といったツールを作ることができました。今後はこのツールを活用して、県内の小中学校への普及活動に取り組んでいきます。



2ヶ月かけて一から作り上げた15分の寸劇を発表した、オリザさんと仲間たちここで学んだ、ワークショップの手法を活かして、有志が学校でモデルワークショップを行いました



一般公募の40名の受講生が声を出して仲間を集めるワークショップ



演劇のプロット作りで話し合いが難航



中学生、高校生の演技力に助けられました

